# 彩の女 下

平岩弓枝

# 彩の女

彩の女 上

昭和四十八年三月三十日 第一刷
昭和五十年三月二十日 第十一刷

平岩弓枝

発行者 樫原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二一一
郵便番号一〇二

印刷 共同印刷
製本 加藤製本

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

© Yumie Hiraiwa 1973

Printed in Japan

# 彩の女

上

装幀　粟屋充

題字　中田功

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

# 春の旅

東京発七時の新幹線は空いていた。

花曇りの朝で、車内には春の倦怠がただよっている。

「朝飯は、すまされましたか」

ビュッフェの案内が車内放送されると、待っていたように末次元が訊いた。

「いや、まだだ。出かけようか」

福原嘉良は気軽く、腰をあげて通路に出た。

そのとたん、大きな揺れが来た。よろめくというほどでもなかったが、上体がバランスを失って、福原はすぐ後部の座席の背へ片手を突いて支えた。

その席に乗客が居た。

「失礼……」

声をかけて、何気なく視線が落ちる。相手は若い女であった。福原の詫びに会釈を返して、す

ぐ読みかけの本へ顔をうつむけた。
娘の横顔へむけた福原の視線が僅かの間、止った。驚きが、はっきり表情に出ている。
「先生……」
末次に声をかけられて、福原はそそくさと歩き出した。
「御存知の方ですか」
ビュッフェのドアをあけるところで、末次は福原の背後から問うた。偶然、知人に逢ったという福原の表情であった。にもかかわらず、娘のほうは、福原に対してなんの反応もしめさなかったのが末次からみると奇妙であった。
「いや……」
福原の返事は短い。
ビュッフェの窓ぎわの席へ腰をおろして、朝食の注文をする。視線をあげて、もう散りかかった桜のある風景を暫くみていた。
「似ていたんだ。ちょっと……知り人にね」
弁解がましく、とってつけたようにいう。
「はあ」
二十五、六だろうか、と末次は瞥見した娘の印象を想った。
「香子ぐらいの年齢だろうかね」
福原も全く同じことを考えていたらしい。

「いや、香子さんより、一つ二つ上じゃありませんか」
福原香子は末次元の婚約者であった。今年二十四歳である。
「あれくらいの娘の年齢は、わからんな」
煙草の煙が眼にしみたのか、福原は眉をしかめて苦笑した。
「香子さんは残念でしたね。あんなにたのしみにして居られたのに……」
話題が自然にそこへ移った。
「桂離宮は、はじめてだったそうですね」
「あそこは秋がいいんだ。今から見学願いを出しておいて、十一月に、君が連れて行ってやってくれ……案外、それが新婚旅行になるかも知れないな」
やがて、娘の聟になる相手に、福原は気を許した微笑を浮かべた。
ビュッフェの帰途、福原はさりげなく、先刻の娘をみた。
娘は形のいい横顔をみせて、窓外を眺めていた。
浜松をすぎる頃であった。
浜名湖が春の陽を浴びて、列車の左右に拡がっている。
背後をふりむいてみたい欲望に、福原嘉良はしんと耐えていた。
(似ている……)
と思う。はじめて逢った頃の桟敷せい子を彷彿とさせる娘の横顔であった。
せい子に娘があったのだろうか、と思う。今までに、彼女の口から、そんな話は一言も出てい

なかった。
もっとも、いつ逢っても桟敷せい子は口数が少ない。福原と再会するまでの、約二十年を、せい子の口からくわしく訊いたことはなかった。
話すのは、いつも福原のほうで、せい子はひっそりときいている。逢う時間が慌しすぎるせいもあった。
背後の娘の年頃を、同行した末次は二十五、六ではないかといった。
二十五歳なら昭和二十一年生まれだし、二十六歳なら終戦の年、昭和二十年生まれの筈であった。
（せい子は結婚して、その夫は死んだときいている……）
福原は胸中で慌しく、年を数えた。
福原がせい子と別れたのは昭和二十年の春であった。
もし、せい子がその直後に結婚したとすれば、すぐに子供が出来たとしても昭和二十一年以降になる計算であった。
馬鹿な、と福原は内心、苦笑した。
背後にかけている娘が、いくら桟敷せい子の若い頃に似ているからといって、すぐ、せい子の娘ではないかと考えた自分の飛躍が可笑しかった。
他人の空似ということもある。
第一、あんな大きな娘がいたとすれば、今までの逢瀬の折に、まるでその話が出ないというこ

とはなかろうと思った。
福原と別れた後に、結婚したと話したせい子である。子供の有無をかくす必要はまるでない。
「先生は、桂離宮は、今度で何度目ですか」
隣から、末次が問うた。
なんとなく、福原はぎくりとした。はじめて桂離宮をみに行った時、同行者は桟敷せい子であった。せい子がみたがって、福原が見学許可願いを出した。
「二度目です……」
声がくぐもった。
「今度は香子のお供のつもりだったんだよ。あれが、どうしても桂離宮をみたいというものでね。それで末次君に無理をいったのだが、肝心の御当人が病気とあっては、どうも、迷惑なことになってしまったが……」
今度の桂離宮参観は、末次の肝いりであった。
末次の友人に顔のきく男がいて、特別に許可を取ってもらった桂離宮の見学であった。
桂離宮、修学院離宮、京都御所などはあらかじめ参観許可願いを出して、日時の指定を受けなければならない。何カ月も前から書類を提出して、必ずしも希望の日時に許可されるとは限らなかった。
それほど希望者が多いということらしい。
恋人のたっての希望とあって、末次は友人の間を奔走して二人分の許可を得た。

その土壇場で、香子が風邪をこじらせて発熱した。

「折角、許可を取って頂いたのに、悪いわ。お父様、代りにいらっしゃったら……。お父様、桂離宮はもう一度、行ってみたいとおっしゃってらしたじゃないの」

病床の娘が意外なことをいった。末次も、

「それじゃ、今回は先生のお供をして、いろいろとみどころを教えて頂いて来ましょう」

などという。

若い二人が口をそろえて、福原の京都行をすすめている本心は、案外、娘はこの機会に未来の夫と父親の間柄を親しいものにしたいと考えている様子だし、末次のほうは、この旅行の間に、二人の結婚について具体的な相談をしたい腹があるのかも知れなかった。

結局、福原は末次と共に京都へ行くことに決めた。表向きは、城崎に用事が出来たついでということにした。

今までにも、京都界隈には、仮空の用事を作っては、何度か出張している福原であった。それにしても、末次には気の毒な旅になったものだと思う。本来なら、婚約者同志のたのしい春の日帰り旅になった筈である。

「いや、僕はどっちみち、大阪の支社に用事もありますし、奈良の両親の顔をみるのも、久しぶりですから……」

末次は屈託なく笑った。大学を出て、広告会社につとめている。実家は奈良の製墨業で、長兄が家業をついでいるが、両親とも健在である。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「すると、今夜は奈良ですか……」
末次とは桂離宮の参観を終えて別れる予定であった。
「そうします。母が首を長くしているようですから……」
先生は今夜、城崎ですね、といわれて、福原は止むなくうなずいた。
「やはり、事務所のお仕事ですか」
福原建築事務所の仕事のための出張ということになっていた。
「まあ、そんなものです……」
あまり、その話題を続けたくなかった。娘の婚約者に嘘の話を続けるのは、心苦しい。
その時、車内放送があった。
電話の呼び出しである。福原嘉良に京都から電話がかかっているということであった。
「ちょっと失礼……」
福原は電話室のあるビュッフェへ急いだ。血が顔に上っているようであった。京都からこの列車へ電話をかけてくるとすれば、相手は桟敷せい子の外には考えられない。
桟敷せい子には、あらかじめ、電話でこの列車で京都へ行き、桂離宮を参観してから城崎へ向う予定をくわしく知らせてあった。
それにしても、列車内へ電話をしてくるのは、よくよくのことである。
電話室へ入って、受話器を取った。
「福原ですが……」

他人行儀な表現をした。
「先生……申しわけございません」
せい子の声がいつもよりたどたどしい感じであった。列車内へ電話をかけているという気ぜわしさのせいかも知れなかった。
急に都合が悪くなって、今日は夜までに家へ戻らねばならない、という。つまり、城崎へは泊れないという意味であった。
「それで、今、どこに……」
落胆をおさえて、福原は訊ねた。せい子は京都の郵便局だと答えた。
「夜までは自由なんですね」
細い声の返事を確かめてから、福原は京都の宿を指定した。先に行って待っているようにという。
宿といっても、旅行者のためのものではなかった。時間で使うことも、泊ることも出来る。今までにも、福原は何度か、その家でせい子に逢っていた。
席へ戻るまでに、福原は桂離宮参観を変更する口実を考えていた。
せい子の予定が変った以上、福原も旅程を変えねばならない。
城崎での打合せが、先方の都合で京都に変ったと福原は説明した。
事情は電話でよくわからないが、先方はすでに京都に出て、福原を待っている、という。
せい子を、仕事の相手におき変えるだけで話の辻褄は簡単に合った。

「そりゃ大変ですね」
末次は疑うふうもなかった。
「残念だが、桂離宮は諦める他はない。君には、どうも申しわけないが……」
結果的には、父娘で末次との旅をふったようなことになる。
「お仕事では仕方ありません。今回は僕一人でみて来ましょう」
京都駅のタクシー乗場で、福原は末次と別れた。
福原を先の車に乗せ、末次は続いて来た小型タクシーに乗り込んだ。
桂離宮と、行先をいうと、何時からの参観かと問い返してくる。
京都のタクシーは観光客に馴れていた。
「十一時からのだが……」
時間は充分であった。バスや電車で出かけても間に合う筈である。
しかし、余裕を持って到着していたかった。
待望の桂離宮との対面である。慌しく、かけつけるのは曲がなかった。
タクシーが走り出した時、末次はタクシー待ちの行列の中に、あの女が並んでいるのをみつけた。
新幹線の中で、末次達の背後の席にいた若い女である。
福原が、知人に似ている者があるといった娘が、やはり京都で下車してタクシーを待っている。
別に、どうということではなかった。あの娘も京都でおりたのだな、という程度の感じである。

福原が、その娘を見た時の衝撃に、末次は気づいていなかった。
タクシーは、まだ本当に活気づかない古都の町を走っている。
末次は久しぶりに開放的な気分を味わっていた。
福原に急用が出来たことは、もっけの幸いというほどでもなかったが、幾分か、ほっとしているのは事実である。
婚約者の父親のお供をするのは、苦痛ではないまでも、どこか窮屈で気骨の折れることであった。
京都も、来る度に車が増えている。その割に町並に変化がないのが、なによりの救いであった。
桂川の流れがみえるまでに、二十分かかっていた。
京都の郊外なのである。
川の水は少なく、清らかさに欠けていたが、堤には行く春の気配が感じられる。
「ここでいい。ここでおろして下さい」
川に沿った道の、桂離宮独特の竹垣のあたりで末次はタクシーをおりた。
時間に余裕のあることである。
離宮の門前へ車をのりつけるのは気分的に抵抗があった。
竹垣について、ゆっくり歩いた。
竹垣をまがった所に、門があって、受付がみえる。
かなり早く到着したと思われるのに、入口のあたりに人影がもう待っている。

この門の前までは、以前、一度、来たことがあった。前もって許可を得ていないと参観出来ないと知って、いくらか腹立たしく、この辺りを行きつ戻りつした記憶がある。
タクシーや自家用が次々と到着していた。みんな十一時の参観者たちのようである。
門を入れば、待合所があるのだが、末次は受付をすませて、やはり竹垣のほとりに立っていた。
何気なくみていると、末次が歩いて来た道に不意に人が現われた。
赤いコートに見おぼえがある。
おや、と思った。新幹線の中の娘である。駅前でタクシーを待っていたのだから、おそらく車で来たものだろうに、門前まで乗りつけずに、末次と同じような行動をとったらしいことが、末次には親近感をおぼえた。
娘が、末次に気づいた。
むこうも末次をおぼえていた。奇遇に一瞬、眼をみはっている。末次が微笑すると、娘は腰を折って、会釈を返した。
「また、逢いましたね」
自然に声が出た。
娘は、それにも微笑で応じただけである。末次の前を通って、まっすぐ受付へ行き、参観許可書を提示している。
はじめて、末次は娘を凝視した。
体格は小柄なほうなのに、コートからすらりと伸びた脚が、美しい。これほど魅力的な脚を持

った女を、末次は今までに見たことがなかった。
末次の位置からみえる娘の横顔はきりっとしていた。眼鼻立ちが整いすぎていて冷たくみえるところを、やさしい口許の雰囲気が救っている。どちらかというと、唇は官能的ですらあった。当人もそれを意識しているのか、口紅を殆んどつけていない。もし、赤く濡れ濡れと輝くような紅をつけて、夜の光の中でみたら、男を誘い込まずにはおかないような唇である。
唇と脚に、末次の意識が強く残った。それでいて、彼女の持つ雰囲気は、桂離宮を背景にして、清潔で素朴ですらある。
彼女の動きに従って、末次も通用門をくぐり、昔の供待を改造したという待合所の前に立った。
ちょうど定刻で、案内の職員が詰所から出て、群れている人を馴れた動作で、旧供待のわきの庭門から庭内へ導いて行った。
庭門を入ると御幸道で、案内は左手の大橋を渡り、前方に蘇鉄山をみながら、外腰掛へむかって行く。
ちょうど桜の季節なのに、見渡した所、桂離宮の中には桜樹が少ないようであった。
参観者は、外腰掛の前へ集められて、案内の職員から、桂離宮の沿革について説明を受けていた。
桂離宮の創始者は八条宮家の初代、智仁親王で、後陽成天皇の弟君に当るという。
もっとも、最初の頃は桂山荘ともいうべき簡素なもので、今のような造園美が整ったのは、二代、智忠親王になってからのことらしい。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.